

# 岡崎

徳川家康公生誕の地





# 楽しみ方、\\いろいろ// 岡崎の旅

## CONTENTS

- 家康の生涯と岡崎
- 波乱万丈の人生の幕開け 岡崎時代の家康
- 家康生誕の地 岡崎
- 家康を支えた家臣たち 三河武士の活躍
- おかえりなさい、家康公 三年ぶりの家康行列
- 『どうする家康 岡崎 大河ドラマ館』 一月二一日開館
- まちを彩る岡崎名物
- 岡崎マップ



豊かな暮らしに 出会う旅

**おかざき 岡崎おでかけ ツアーズ**

岡崎市観光協会がお届けする岡崎旅「岡崎おでかけツアーズ」。「あるきツアー」「バスツアー」「体験プラン」「タクシープラン」など、各種プランで家康公生誕の地・岡崎をご案内。定番コースからディープなコースまで、多彩なプランを取りそろえて皆さまのお越しをお待ちしております。詳しくは、ホームページにてご確認ください。

詳しくはWEBで！




## 岡崎おもてなしガイド

豊富な知識と岡崎愛あふれる地元ガイド「岡崎おもてなしガイド」。歴史はもちろん、住んでいるからこそ情報で、岡崎の旅の楽しさを更に盛り上げます。行先、お時間など、ご都合に合わせ、3つのタイプのガイドからお選びいただけます。ご利用方法、営業時間等は、必ず各団体ホームページをご確認ください。



### 岡崎 拠点型 無料観光ガイド

#### おかざき観光ガイドの会

おかざき観光ガイドの会 TEL 0564-23-3751



岡崎公園内を無料でご案内する岡崎公園内常駐、拠点型無料ガイド。家康公誕生の折につかわれた「産湯の井戸」やへその緒を埋めた「えな塚」など、岡崎公園内に今も残る家康公の物語を、ご案内いたします。  
営業時間：9時30分～15時 ※夏季、冬季休暇あり

### 岡崎 同行型 有料観光ガイド

#### 岡崎歴史かたり人

岡崎歴史かたり人 TEL 0564-64-1637



岡崎市内の家康公ゆかりの寺社などの歴史的スポットを、歩きやバス同乗等、ご都合に合わせたスタイルでご案内する随行型有償ガイド。個人の方から団体様まで、お気軽にお問い合わせください。ご利用の際は、必ず10日前までにご予約下さい。

### おかざき手話ガイド

#### デフ葵

家康公のゆかり深い岡崎公園、大樹寺を、地元ろう者が手話でご案内いたします。

※お問い合わせ・お申込は、必ずメール、もしくはFAXをお願いします。



発行年月 2022年12月

発行 岡崎市「どうする家康」活用推進課 TEL 0564-23-6978

編集 月刊『江戸楽』編集部 エー・アール・ティ株式会社



# 家康の生涯と岡崎



## 徳川家康公 岡崎 生誕の地



### 家康の人生観を形成した最重要地・岡崎

徳川家康のルーツは三河国松平郷（現・豊田市松平町）の豪族・松平氏である。三代信光は西三河に勢力を伸張。七代清康は岡崎城を拠点として三河統一まであと一步のところの家臣に殺害され、八代広忠は今川氏を頼ることに。そのような中、天文十一年（一五四二）、家康は岡崎城で誕生した。尾張や駿府で十数年にわたる人質生活を経て、今川義元が「桶狭間の戦い」で討ち死にした際、岡崎城に戻って自立を果たす。そして岡崎城を拠点に三河を平定し、戦国武将として台頭していく。

その後、岡崎城を嫡男の信康に任せ、自らは浜松城に移る。本能寺の変で織田信長が討たれると、堺（現・大阪府堺市）に滞在していた家康はわずかな手勢と共に命からがら岡崎まで戻った（伊賀越え）。その後の家康は浜松から駿府、そして江戸へ移り、將軍職を譲った後は再び駿府に戻って生涯を終えている。

江戸時代 260 年の平和の礎を築き、日本の歴史上、最も重要な人物として挙げられる徳川家康。その波乱万丈の生涯は歴史研究の対象となったばかりでなく、小説、映画、ドラマなど様々な作品でも描かれてきた。そして 2023 年には大河ドラマ『どうする家康』が放送される。ドラマでは若き日の家康が戦乱の世へと飛び込んでいく姿が描かれるという。家康生誕の地であり、青年時代に天下泰平の志を立てた岡崎を中心とする三河地方は、その主要な舞台となるだろう。

本誌では若き日の家康が駆け抜けた「岡崎」に焦点を当て、家康はどのように人生観を確立したのか、そして家康を支えた三河武士たちの活躍を紹介する。

天正 11 年 1542 年 1 歳	岡崎城で誕生
天文 16 年 1547 年 6 歳	織田信秀の人質として尾張へ
天文 18 年 1549 年 8 歳	今川義元の人質として駿河へ
永禄 3 年 1562 年 19 歳	桶狭間の戦い。岡崎に戻り独立
永禄 5 年 1564 年 21 歳	信長と清州同盟
永禄 6 年 1565 年 22 歳	三河一向一揆
元亀 元年 1570 年 29 歳	姉川の戦い。浜松城を本城とする
元亀 3 年 1572 年 31 歳	三方ヶ原の戦い
天正 3 年 1575 年 34 歳	長篠の戦い
天正 7 年 1579 年 38 歳	夫人の築山殿を殺害、長男の信康を自害させる
天正 10 年 1582 年 41 歳	武田氏滅亡で駿河国を得る 本能寺の変。「伊賀越え」で堺から岡崎へ戻る
天正 12 年 1584 年 43 歳	小牧・長久手の戦い
天正 14 年 1586 年 45 歳	浜松城から駿府城へ移る。秀吉に臣従
天正 18 年 1590 年 49 歳	小田原征伐。江戸入城
慶長 5 年 1600 年 59 歳	関ヶ原の戦い
慶長 8 年 1603 年 62 歳	征夷大將軍になる。江戸幕府成立
慶長 12 年 1607 年 66 歳	駿府城を築き、隠居城とする
慶長 19 年 1614 年 73 歳	大坂冬の陣
慶長 20 年 1615 年 74 歳	大坂夏の陣
元和 2 年 1616 年 75 歳	駿府で死去



# 波乱万丈の人生の幕開け

## 岡崎時代の家康



「東照大権現像 守澄法親王賛」（とうしょうだ  
いごんげんぞう しゅちょうほっしんのうさん）  
（岡崎市美術博物館所蔵）



平山優さん

専攻は日本中世史。山梨県埋蔵文化財センター文化財主事、山梨県史編さん室主査、山梨大学非常勤講師、山梨県立博物館副主幹を経て、山梨県立中央高等学校教諭。著書に『戦国大名と国衆』（角川選書）、『天正壬午の乱増補改訂版』（戎光祥出版）など。大河ドラマ『真田丸』（2016年）、『どうする家康』（2023年）では時代考証を担当

徳川家康の前半生における主要舞台・岡崎。若き日の家康はどのような環境の下で、岡崎から三河一國、そして天下統一へと動き出していくのか。NHK大河ドラマ『どうする家康』で時代考証を担当する平山優さんに話を聞いた。

### 岡崎の「国衆」から天下人に上り詰める

今回の大河ドラマのタイトル「どうする家康」は、家康の人生の本質をよく表していると思います。家康は青年期に岡崎に戻って独立してから、晩年にさしかかる頃の関ヶ原の戦いまで、常に生きるか死ぬかの選択を迫られていました。私は長年、武田氏の研究をして

きました。武田と徳川は同じ戦国武将のように語られますが、家の格式が全く違います。武田は鎌倉時代以来の伝統的な守護大名の家柄で、徳川は「国衆」。地方の小規模な領主に過ぎません。武田信玄は家康と同盟を結んでいる時は「徳川殿」「徳川三河守」と敬称で呼ぶのですが、仲間内では「松平蔵人」とか「岡崎」と呼び捨てにしていました。国衆あがりだからと

格下に見ているんです。前半生の主要な舞台、岡崎では危機の連続でしたが、一方で幸運も重なります。家康は三河平定の過程で一向一揆（※1）の対応に苦慮しました。家臣たちも二つに割れてしまったので、もし外から攻められたらひとたまりもなかったでしょうね。ところが幸運にも今川氏真（※2）は遠江の国衆たちの反乱の鎮圧に追われ、三河に

手が出せない。武田信玄も上杉謙信との戦いが忙しくて余裕はない。周りの強敵が手出しをできない状況で、家康は一揆を鎮圧していく。そして一向宗の寺院を壊して僧侶たちを追放します。この対応も、のちに家康に幸運をもたらしました。信玄が攻めてきた時、本願寺は一向宗門徒に「信玄へ協力するように」と命令を出すのです。それが担う寺院も僧侶もいな

いから一揆が起きなかったのです。

### 史実に基づいた家康像を描く

大河ドラマでは家康の家臣たちも多く登場する予定です。家康にはまず、先祖の松平氏が西三河に勢力を広げていた頃からの譜代家臣がいます。さらに祖父の清康や父の広忠の時代、今川氏と連携しながら勢力を広げ、従属させていった三河の領主や国衆たちもいます。こうした者たちの複合体が家康の家臣団となりました。

家康は人材活用に長けていたと言われていますが、これは信長や秀吉にも共通する傾向でした。ベンチャー企業のように数人から始まり、急成長した集団なので、外から人材を取り入れないと回していけなくなる。家康が今川、武田、北条の遺臣を登用したのは、何も家康の心が寛容だったからではなく、人材が欲しかったのです。

松平氏は単独では領地を維持できず、今川氏を頼るしかなかったのです。広忠が早くに亡くなったので、今川義元は幼い家康を預かって養育し、学問や帝王学を身につけさせました。さらには今川一門の女性と結婚もさせました。今川氏の一門格として今川義元からの期待を一心に集めていたといえるでしょう。

家康の家臣団の中でも特に三河武士は結束が固いと言われますが、これは家臣・大久保彦左衛門の回顧録『三河物語』による創作の影響が大きいと考えられます。家康は結果的に天下人になる

よく、『三河武士は今川と織田との戦の最前線に立たされて犠牲を強いられた』と言われますが、三河は尾張と隣接しているわけですから、その地域の武士が先頭に立つのは当然のことです。いかに自分たちが今川氏にいじめられて苦勞したか、惨めだったかは、後付けの話なんです。私たちは『三河物語』や『徳川実紀』（※3）などに書かれた松平・徳川を中心とする史観を脱却しないといけない。やっとなんか意識しながらの研究が始まったのが、歴史学の現段階です。



明治時代に月岡芳年が描いた「徳川治績年間紀事 初代安国院殿家康公」（一部／国立国会図書館所蔵）。元龜3年（1572）の「一言坂の戦い」を描いたもの。右が家康、中央が多摩忠勝

康は結果的に天下人になるので、三河以来の家臣たちは「俺たちが家康公を支えてきた」という自意識が非常に強い。『三河物語』では幼い家康が今川の下で駿府にいる頃、自分たち家臣は三河で今川の支配を受けて苦勞し、辛い任務を課せられながら家康の帰りを待っていたというストーリーを描いています。でも実態は異なり、家康は今日の私たちがイメージするような「人質」ではなかった。当時、

家康が幼少期、駿府に行く予定だったのに、途中でさらわれて織田側に送られたという話がありますが、あれも最初から織田に送ら

れる話になっていたことがわかる文書が近年発見されました。また、桶狭間の戦い後、岡崎に戻った家康は今川方が退却したのを見て「今川方が捨てた城だから拾おう」と言っている。岡崎城を奪取したという話がありますが、あれも創作でしょう。実際は、家康は今川氏真に命じられ、許可されて岡崎城に戻っています。柴裕之氏の著書『青年家康 松平元康の実像』によると、岡崎に家康が帰ると、氏真は妻と娘も岡崎に向かわせている。これは許可しているのでしょうか、というように思います。

今後も史実に基づいた検証をしていく必要はありますが、家康が世の中を大局的に見ることができ、太平の世を築いた偉大な人物で、あったことに間違いはありません。ルーツは岡崎の「一介の小領主」に過ぎないのに、最後は天下人になり、巨大都市江戸を築き、二六〇年に及ぶ江戸時代の制度設計をきっちりやり遂げた稀有な人物。若き日の家康が置かれた環境を考えると、一体誰がそんなスケールの大きな人生を歩むと予想できたでしょうか。

※3 19世紀前半に編纂された江戸幕府の公式史書

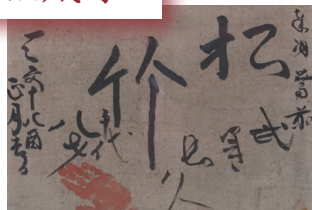
※1 家康の家臣が一向宗寺院に強制的に立入り兵糧米を徴収しようとしたことに対し、一向宗の門徒が反発したために起きた一揆。参加者は武士、地主、農民、僧侶などに及び、家康家臣の一向宗信者も加担した

※2 桶狭間の戦いで今川義元が討たれた後、その跡を継いだ





法蔵寺



東岡崎駅<sup>もとじゅくえき</sup>から豊橋方面へ5駅、「本宿駅」<sup>ほんしゅく</sup>徒歩6分の山裾<sup>やますそ</sup>に佇む古刹。松平一族で家康の従兄弟、そして家臣でもあった松平康忠の親戚が法蔵寺の住職だった縁から、家康は幼い頃こちらに通って読み書きを習った。硯箱、机など幼少期の品が数多く残る（通常非公開）。

左下の写真は家康の書と伝わるもので、「奉納尊前 武運長久 松 竹千代 八才 天文十八年正月吉日」と書いてある（松は松平、竹千代は家康の幼名）。右下は家康が使った机と伝わり、城の絵と「竹千代」の文字が刻まれている。

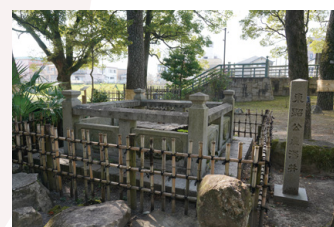
岡崎市本宿町寺山 1



岡崎城



江戸時代の岡崎城図（岡崎市美術館所蔵）



矢作川<sup>やはぎ</sup>や乙川<sup>おとがわ</sup>の舟運と東海道の往来が盛んな交通の要衝だった岡崎は、武士たちにとっても重要な戦略拠点とされた。岡崎城は15世紀前半、国人領主の西郷氏が乙川北岸の龍頭山に砦を築き、のちに家康の祖父・松平清康が南岸から本拠を移し整備した。家康は天文11年（1542）、この城で誕生する。桶狭間の戦い後、独立して天下統一への第一歩を踏み出したのもこの岡崎城である。

家康が江戸に国替えとなり、豊臣家臣の田中吉政が城主だった時代に城の整備拡張が行われ、現在の市街地の広い範囲にまで及ぶ広大な面積の城となる。江戸時代には五万石で、石高だけ見ると高くはないが、家康生誕の特別な場所として代々の城主は誇りに思っていたという。

天守は1959年に復元されたものだが石垣は当時のままで、1階には旧天守の心柱だった礎石が残る。内部は歴史資料館と展望室（2023年1月21日リニューアルオープン）。城内には家康が産湯に使った井戸（写真右下）や胎盤を埋めた「えな塚」（左下）もある。

岡崎市康生町 561-1 岡崎公園  
※岡崎城天守は2023年1月20日まで休館

家康生誕の地



青年家康の足取りをたどって、岡崎を歩いてみよう。町のいたるところにその遺徳をしのぶ史跡やモニュメントが点在している。若き家康がその目に焼き付けた景色が、ここにある。



東岡崎駅



旅の始まりは名鉄・東岡崎駅。駅構内には大河ドラマ『どうする家康』のポスターがずらりと並ぶ。松本潤さん扮する家康が三河の藍染をイメージした衣装をまとい、力強く一步を踏み出す様子がデザインされている。

東岡崎駅と商業施設を繋ぐペデストリアンデッキ上に建つ家康の銅像は、2019年に岡崎市が市内外から寄付を募って誕生した。松平から徳川に改姓した25歳当時の若い家康がモチーフとなっている。台座を含めた全高は9.5mで、日本最大級の騎馬像。

岡崎市上明大寺町 2-17-1

徳川家康公像



家康公生誕祭



市民が主体となって2012年から始まり、家康の生誕日である12月26日を中心に開催。2022年は松平広忠と於大の方の練り歩きと竹千代縁起米を配布する「家康公生誕祝道中」、神仏加護を願う「幕目の矢」の実演、竹千代行列などが行われる。



六所神社



東岡崎駅から徒歩2分。家康誕生<sup>うぶすながみ</sup>の折に松平氏の産土神として参拝されたと言われる。社殿は三代將軍家光が造営。社殿、楼門、神供所が国の重要文化財となっている。

岡崎市明大寺町耳取 44



## 大樹寺



家康の祖父であり、松平氏七代目の清康が寄進した多宝塔は国の重要文化財

大樹寺は家康の人生において重要な役割を果たした寺院であり、岡崎と家康とのゆかりを訪ねる上では欠かせない場所だ。創建は文明7年（1475）。室町時代の古戦場跡を供養するために松平四代・松平親忠が勢管上人を迎え、松平家の菩提寺とした。寺の名は松平の家中から征夷大將軍（唐名※で「大樹」）が出ることを願ったのが由来とされている。その願いを叶えたのが九代目の家康だ。家康は桶狭間の戦いで今川義元が討たれると、織田氏に追われ、守備をしていた大高城（名古屋）から岡崎へ撤退した。岡崎城には今川氏の城代が残っていたため、家康は大樹寺に身を寄せる。この時、家康を討って手柄を立てようと追ってきた野武士の一隊に対し、怪力の祖洞和尚が門のかんぬきを引き抜いて奮戦し、退散させたという逸話も残る。自刃まで考えた家康だったが、登管上人に諭されて「厭離穢土 欣求浄土」の言葉を授かった。苦悩の多い穢れたこの世を離れ、心から欣んで浄土のように平和な世を築く。それが自分の使命であると決意した。

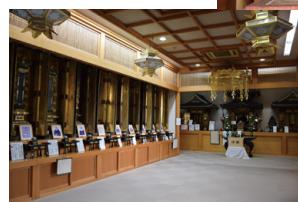
貫主の中村康雅さん（写真左）は次のように話す。「この言葉は平安中期の高僧・恵心僧都が著した『往生要集』の中の言葉です。家康公は以後、この言葉を旗印に掲げました。平和とは戦争を終わらせるだけでなく、人々が安心して衣食足り、文化的な暮らしを送れる世のことです。江戸時代は庶民も識字率が高かったといえますね。幾多の危機を乗り越えてその社会を実現した家康公は、世界史の中でも稀有な存在だと思います」



大樹寺の襖絵は国の重要文化財。安政4年（1857）、絵師の冷泉為恭（れいぜいためちか）により描かれた大作だ。「長らく収蔵庫に保管し、一部を公開していましたが、令和5年よりレプリカを作成し、全貌を公開（有料）しています」と執事の野村顕弘さん（写真右）



三代將軍家光は大樹寺を整備する際、「祖父・家康の生誕の地を望めるように」との想いから本堂、山門、総門を通して、その真中に岡崎城が望めるように伽藍（がらん）を配置した。現在、岡崎市ではこの眺望を「ビスタライン（歴史的眺望）」と称し、景観保全につとめている



岡崎市鴨田町字広元 5-1

大樹寺には松平氏初代から八代までの廟所と位牌、歴代將軍の等身大のものと伝わる位牌が祀られており、幕府の手厚い庇護を受けてきたことが窺える。位牌堂に安置されている木像は正保4年（1647）の作で、家康が73歳の時の姿と伝えられている。

岡崎城では中世から近世に至る石垣の変遷を見ることができる。右の写真の左側は「自然石積み」、右側が割った石材を使用する「割石積み」。他にも、割石をさらに加工した切石で隙間なく積む「切石積み」を見られる場所もある。写真左下は経年による石垣の崩落を防ぐため、石と石の間隔を測っている様子。目盛りが広がっていないか定期的にチェックしている。こうした地道な作業の積み重ねにより、歴史は守り伝えられていく。



豊臣秀吉が刀や書など自分の宝物を自慢した後に「徳川殿は何の宝をお持ちか？」と尋ねると、家康は「私は珍しい書画や調度品はありませんが、私のためには命を惜しまない者が500騎ほどおります。これこそ第一の宝です」と答えたという（『徳川実紀』より）。「三河武士のやかた家康館」は家康の生涯と、その“宝物”である三河武士たちの生きざまを展示（現在、2023年1月21日に大河ドラマ館としてリニューアルオープンするため休館、改修中）。

## 徳川四天王像



2020年、乙川にかかる「桜城橋」が完成し、橋の北側の遊歩道に徳川四天王（酒井忠次、本多忠勝、榊原康政、井伊直政）の石像が造られた。家康のみならずその家臣たちをも敬愛する市民の想いが伝わってくる。写真は酒井忠次像。

岡崎市康生通南3丁目（中央緑道内）

## 岡崎城リニューアル



2023年1月21日、岡崎城が新しく生まれ変わる。2階では岡崎城の成り立ちや特徴を模型や絵図で、3階の展示室ではAR（拡張現実）やデジタルサイネージを使用して城下町の賑わいを紹介。4階のシアタールームでは壁3面と床面に投影された映像で、江戸時代の城下町が体験できる。

## 伊賀八幡宮



文明2年（1470）、家康の祖先・松平氏の四代親忠が松平家の氏神として武運長久・子孫繁栄の祈願のため伊勢国から勧請した。本殿は家康が造営。家康の父祖や自身も戦いの前に祈願したと伝えられる。本殿、拝殿、幣殿、御供所、随神門、神橋、鳥居などが国の重要文化財。

岡崎市伊賀町東郷 86

※日本の律令制下の官職名を、中国の官称にあてはめたもの



# 本多忠勝

勇将として知られ、知将としても名高い。「家康に過ぎたるものが二つあり 唐(から)の頭(かしら)に本多平八」(※)と敵将からも称えられた。家康の関東移封に伴い上総国大多喜城主に。関ヶ原の戦い以後、西国への備えとして伊勢国桑名城を与えられた。子孫は岡崎藩主として幕末まで存続した。

※「平八」は忠勝のこと。「唐の頭」とはヤクの毛で作られた兜飾りのことで、中国やチベット原産。日本では珍しく、家康はこれを受用していた

武勇に勝り、殿を天下人に導きました。生涯で57回出陣し、かすり傷ひとつ負いませんでした



# 井伊直政

三河出身ではありませんが、常に誇りを持って三河武士に負けぬ働きをし、殿の信頼を得ました



# 酒井忠次

酒井氏は松平氏と祖先が同じといわれ、忠次は家康の義理の叔父でもある。家康の家臣団の筆頭格。質実剛健、三河武士を束ねる存在だった。東三河平定時に吉田城を与えられる。家康が精強な武田遺臣「赤備え」の軍団を酒井忠次に預けようとした時、忠次は若い井伊直政の活躍を期待して譲った。直政の先輩格の榊原康政はそれを知らずに「自分に預けてほしかった」と不平を言ったため、忠次は康政を叱り飛ばしたという逸話がある。

家康公より15歳上で、家康公のことを一番よく知る存在。年長者なのでみんなから慕われています



# 徳川四天王

まずは家康に重用され、「徳川四天王」と呼ばれた4人を紹介。グレート家康公「葵」武将隊もその魅力をお話します！



三河一向一揆の武功で家康から「康」の字を与えられる。智謀にも長け、小牧・長久手の戦いでは秀吉軍の戦意をくじくため、「秀吉は信長から受けた恩を忘れている。秀吉に従う者はみな義を知らない者だ」と檄文(げきぶん)を触れ回して三河武士たちを奮い立たせたという。秀吉は激怒するが、終戦後、秀吉は康政に「今では遺恨が無くなり、かえって主君への忠義心に感服するばかりだ」と話したという。「人たらし」の秀吉らしい逸話。

# 榊原康政

大樹寺で学問修行をしていた頃、殿に見出されます。家臣の中で人品が最も高いといわれ、秀忠公の教育係も任されました。



# 家康を支えた家臣たち 三河武士の活躍

大日本歴史錦繪 (国立国会図書館所蔵)

## 家臣をまとめあげ 天下を動かした家康

尾張・三河は、「戦国三英傑」といわれる織田信長、豊臣秀吉、徳川家康をはじめとする個性豊かな武将たちを輩出した「武将のふるさと」。江戸時代の大名の約七割が、現在の愛知県出身の武将の子孫や家臣の家柄といわれている。そして三河は「江戸のふるさと」でもある。家康の先祖・松平氏に代々従い、あるいは家康が三河に在城していた時代に服属した三河武士たちは「三河譜代」と呼ばれ、家康が関東へ国替えとなった際は関東地方や江戸の都市づくりにも力を尽くした。三河武士の働きなくして今の東京、そして日本の発展はなかったかもしれない。忍耐強く忠勇無双と称えられる三河武士だが、「三河物語」など後世の創作によってそのイメージ

が膨らんだとされている。戦国時代、強い者に付き従うのはこの時代の常であり、三河武士だけが最初から忠義に厚い気質を持っていたわけではない。そもそも松平氏には諸家があり、激しい派閥争いをしてきた。三河一向一揆では一向宗側につく家臣も多くいた。家康は一向一揆で敵対し、のちに帰参した家臣たちを赦した。そして領内を安定させるために新しく軍制を敷き、東三河は酒井忠次、西三河は石川家成(のち石川数正に交代)を旗頭に据え、その下に松平一族、譜代、三河国衆を置いて命令系統を整えた。また、本多忠勝、榊原康政など自身の周りを固

## グレート家康公「葵」武将隊

岡崎市の魅力を発信する観光PR隊で、メンバーは徳川家康、徳川四天王(酒井忠次・本多忠勝・榊原康政・井伊直政)、本多忠勝の娘・稲姫の6人。岡崎公園を中心に各地で演武やパフォーマンス等を展開し、観光客やファンを楽しませている。



める直轄の旗本も置く。こうして三河武士をまとめあげ、家臣たちから忌憚(きたん)なく意見を聞き、家臣団を次第に強固なものにしていったのだ。家康に導かれた家臣たちはその能力を存分に発揮し、戦の世と平和の世、二つの時代に活躍することになる。

数々の戦場で活躍し、江戸幕府の基盤整備にも力を尽くした家康の家臣たち。なかでも松平氏に代々従い、あるいは家康に見出された三河武士たちは、人材の層の厚さが際立っている。彼らの来歴を紹介しよう。





家康を支えた家臣たちが描かれた「徳川十六神将図」  
(大樹寺所蔵。画像提供：岡崎市美術博物館)

本多忠勝の本多氏とは別流。本多正信は幼い頃から家康に仕えていたが、一向宗の熱心な信者で一揆側についたため、一揆平定後は追放され加賀に移住。その後、帰参し、家康の参謀として活躍。家康の死からわずか49日後、後を追うように死去する。嫡男・正純は日光東照宮などを造営するが、秀忠に疎まれて改易処分となる。のちに歌舞伎や講談にもなった「宇都宮城釣天井事件」は、正信の居城である宇都宮城の無断修理の話が膨らんで流布された風説。

## 本多正信・正純

## 平岩親吉

家康と同年で、人質時代からの忠臣。家康の嫡男・信康の傳役(世話係・教育係)にも任命されている。信康が切腹を言い渡された際、親吉は自分が代わりに切腹すると懇願したという。子がなかったので家康の八男・仙千代を養子に迎える。家康が息子を家臣の養子に出した唯一の事例で、信頼されていたことがわかる。仙千代が六歳で夭折後は跡継ぎがなく廃絶となり、一族の多くは尾張藩士に取り立てられた。

## 江戸を築いた三河武士

家康の関東移封後、三河武士たちは関東・江戸の各地に配属され、江戸城の守りを固めると共に、江戸町割りやインフラ整備にも力を尽くした。内藤清成は広大な屋敷地を与えられ(のちの新宿御苑)、内藤新宿の宿場町を整備。青山の地名の由来となった青山忠成も幕府初期の治世を支えた。伊奈忠次とその子孫は利根川や荒川の治水工事を行って江戸の町を洪水から守り、新田開発にも力を入れた。忠次の息子と孫は玉川上水の工事にもかかわっていた。大久保忠行(主水)は小石川上水(のちの神田上水)をひいて江戸に初めて上水をもたらした。



歌川広重「東都名所 御茶之水之図」。神田川を横切る懸樋(水道橋)の中を、神田上水が流れている。江戸時代、「水道の水で産湯につかる」のは江戸っ子の自慢だった(国会国会図書館所蔵)

## 三河武士

ここからは四天王以外の三河武士たちについて紹介します。個性と才能にあふれた家臣たちがたくさん！



## 大久保忠勝・忠世・忠隣

大久保忠勝は家康の父・広忠が蟹江城を攻めた際に勇猛に闘った7人の家臣「蟹江七本槍」の一人。従兄弟の忠世も家康の下、数々の戦いで武勇を発揮した。家康の関東移封後、豊臣秀吉は家康に、忠世を小田原城主にするよう命じている。忠世の弟は『三河物語』を書いた彦左衛門忠教。嫡子の忠隣は幼少時から家康の側近として仕え、秀忠が將軍の頃には幕閣の重臣となるが、後に本多正信・正純父子との対立により失脚する。

石川氏は三河譜代の重臣クラス。石川家成は一向一揆の際、宗旨を改めて家康側に付いた。三河統一後、西三河の旗頭を務め、のちに甥の数正が受け継いでいる。数正は家康が今川家の人質になった際、付き従った側近。戦だけでなく今川氏や織田氏などとの外交でも手腕を発揮。家康の嫡男・信康が自刃後、岡崎城代も務めた。小牧・長久手の戦い後、出奔して秀吉の家臣となった。

## 石川家成・数正

### 家康の関東移封後の主な家臣たちの知行地



- ①井伊直政 ②榊原康政 ③本多忠勝 ④大久保忠世 ⑤鳥居元忠 ⑥平岩親吉 ⑦酒井家次 ⑧大須賀忠政 ⑨奥平信昌 ⑩石川康通 ⑪本多康重 ⑫牧野康成 ⑬菅沼定利 ⑭松平康元 ⑮内藤家長 ⑯高力清長 ⑰松平家忠 ⑱酒井重忠 ⑲内藤信成 ⑳本多正信

鳥居忠吉は家康の祖父、父、そして家康と三代にわたって仕えた。『徳川実紀』によると、今川氏の人質となっていた家康が法要のため一時的に岡崎に帰還した際、忠吉は城内の蔵を見せ、「この米や銭は今川方の監視の目をかすめて蓄えたもの。いつの日か独立した時に使っていただきたい」と伝え、家康は涙したという。息子の元忠も人質時代から付き従っており、数々の戦いでも武勲をあげた。関ヶ原合戦の前哨戦では、家康は元忠に討ち死に覚悟で伏見城に籠城するよう命じ、夜分まで人質時代の思い出を語り合ったという。元忠はその後、壮烈な討ち死にを遂げた。

## 鳥居忠吉・元忠





沿道から声援が飛ぶ。「一生の思い出となりました。甲冑、特に兜がとても重かったですが、心地よい疲れです」と勢さん



今回の行列は参加人数やルートを縮小し、時期も春から秋へとずらして、ようやく実現した。来年放送の大河ドラマ『どうする家康』もPR



市内の小学5・6年生も参加。先頭の兜を被っている少年が家康の幼少期・竹千代役



籠田公園に到着。子どもたちと交流する家康役の勢さんとグレート家康公「葵」武將隊



徳川四天王の隊列の先頭は「井伊直政」隊の赤備え。



家康の母、妻、娘役も参加。行列は一層華やかに



岡崎城のお勝元、乙川河川敷で同時開催された「商工フェア・農林祭」。ステージでは「家康公の初陣の年齢は？」などのクイズが出された。市内特産品のテントでは江戸城本丸御殿に家康が入る時に持って行った縁起物の植物「万年青（おもと）」や、岡崎商業高校の生徒と企業によるコラボ商品「天下のかりんとう」や肉味噌を販売。肉味噌には岡崎の特産品である八丁味噌や岡崎おうはん（地鶏）が使用されている



おかえりなさい、家康公

# 三年ぶりの家康行列

家康役に選ばれた勢了篤さんは「大樹寺にもお参りし、家康公のことを勉強して臨みました。今回は初めての若い家康公役とのことで、さわやかさを出していこう心掛けました」と話す。

## 岡崎時代を象徴する 若き日の家康

二〇二二年十一月五日、コロナ禍のため三年ぶりとなる「家康行列」が岡崎市内で行われた。その起源は江戸時代まで遡る。本多忠勝を祀る「映世神社」の祭礼として、岡崎藩士たちが戦法を鍛錬する儀式が行われたことが始まりとされている。明治維新後、映世神社と家康を祀る東照宮が合併して「龍城神社」となり、旧藩士の子孫を中心に武者行列を行った。第二次世界大戦により行列は行われなくなっていたが、戦後、山岡荘八の『徳川家康』が出版されて家康ブームが起きたことにより、昭和三〇年に商店街連盟と商工会議所が「家康まつり」として復活。昭和三四年の岡崎城復元を機に、市と観光協会による現在の「家康行列」となった。



家康が出陣に際して戦勝祈願をした伊賀八幡宮。家康行列の出発もここから行われた

家康役はこれまで貫禄のある壮年から晩年時代が再現されていたが、今回は大河ドラマ放送目前ということもあり「若き日の家康」がテーマ。一般公募で選ばれたのは市内の企業に勤める勢了篤さん、二九歳だ。「エイ、エイ、オー」と力強い掛け声で「出陣」し、秋晴れの空の下、伊賀八幡宮から籠田公園までの道のりを約三七〇人が時代絵巻さながらに練り歩いた。

十九歳で岡崎城に帰還した家康。そして三年ぶりの開催となる家康行列。岡崎の人々は心を込めて「おかえりなさい、殿」と出迎えた。







# 八丁味噌

家康の長寿を支えたふるさとの味

矢作川の清水を用い、大豆と塩のみを原料に仕込む豆味噌は、健康長寿で知られる家康も好んだとされ、長期保存が可能なが兵糧として携帯したとも伝わっている。その後、岡崎城から西に八丁(約八七〇m)に位置する八丁村(現・八帖町)で造られる豆味噌は、地名を冠して「八丁味噌」と呼ばれるように。

現在でも、「カクキュー八丁味噌」「まるや八丁味噌」の二社が江戸時代より八丁味噌造りを続けている。巨大な杉桶に、



岡崎名物を代表する八丁味噌。市内の飲食店、菓子店でも八丁味噌を用いた商品が数多く作られている



まるや八丁味噌の味噌蔵見学では仕込みの様子を見ることが可能。一度に6トンもの味噌を仕込む、杉桶の大きさに驚くだろう

八丁味噌協同組合  
岡崎市八帖町字往還通 69 (カクキュー八丁味噌内)  
TEL 0564-21-0151

## カクキュー八丁味噌

八丁味噌にまつわる  
貴重な資料も展示

今川義元の家臣であった早川家の先祖は、桶狭間の戦いで敗れた後、逃れた先の岡崎の寺で味噌造りを学び、名を久右衛門と改める。以来、当主は久右衛門の名を襲名し、味噌造り一筋に十九代。カクキューの八丁味噌は、宮内庁御用達であったこと、徳川家・本多家の子孫や、三島由紀夫などの文豪などに愛されたことでも知られる。



工場見学では味噌蔵や史料館をガイドが案内。また、八丁味噌を使った料理やデザートを楽しめる食事処や売店も併設。味噌ソフトクリームは塩キャラメル風味で大人気

岡崎市八帖町字往還通 69  
TEL 0564-21-0151 kakukyu.jp

## まるや八丁味噌

世界二〇カ国以上に  
八丁味噌を届ける

延元二年(一三三七)創業。伝統の製法を守りながらも、海外への輸出や有機栽培大豆の採用など、時代に先駆けて挑戦を続けてきた。天ぷらやアイスクリームにも合う「香味パウダー」は八丁味噌の可能性を広げた一品。三河産大豆と奥三河の天然水で味噌を仕込む「三河プロジェクト」など、地元企業とのコラボレーションも続けている。



見学もできる味噌蔵に併設された売店。一番人気は「みそかりんとう」(378円)。ここでしか買えない、粒が残ったままの味噌もおすすめ

岡崎市八帖町往還通 52  
TEL 0564-22-0222 8miso.co.jp

# 三河木綿

耐久性、耐火性が高く、火消装束にも採用

温暖な気候と矢作川水系の水源により、全国有数の綿花の産地として知られた三河地方。西暦七九九年、この地方に日本で初めて綿種が伝来したと伝わるが、本格的な生産が始まったのは室町時代に入ってから以降のことだといふ。

木綿がまだ一般的ではなかった戦国時代、三河の上質な木綿は大名の幟や戦の際の幔幕にも用いられ、一説には家康が火縄銃の火縄として用いたとも言われる。また街道が整備され岡崎が宿場町として賑わいを見せた



「がら紡」で糸を紡ぎ、昔ながらの力織機で織り上げた三河木綿(ファナビスにて販売 7,700円)

ファナビス  
岡崎市小呂町三乃己田 36-11  
TEL 090-7694-4390

# 和太鼓



直径6尺6寸(直径約2m)、重さ200kg、担ぎ棒を加えると2トンにもなる味噌六太鼓。150年以上前から使われていた桶を用い、多くの市民の協力で完成した

太鼓造りが伝統産業の愛知県でも、独自の文化が残る岡崎市。「ちゃらほこ太鼓」は、真鍮の胴に十二本のボルトで牛皮を張る、他に類を見ない太鼓だ。「神社の境内で開催されるお囃子の合戦で、互いに相手よりも高く遠くまで響く音を追求めたことから誕生したのでしょ」と市内唯一の製造元「三浦太鼓店」五代目の三浦宏之さんは話す。三浦太鼓店ではちゃらほこ太鼓をはじめ、大小さまざまな和太鼓を制作。「岡崎市民のふるさとの風景になれば」と作り上げた、味噌桶の底板を使った味噌六太鼓が「岡崎城下家康公夏まつり」に華を添えている。

三浦太鼓店  
岡崎市本宿町字丸山腰 30-9 TEL 0564-64-6785

# 健康長寿めし

家康にあやかった  
岡崎の新名物



岡崎ニューグランドホテルで提供中の「家康ふるさと御膳」(4,000円)。淡雪豆腐、みかわ和え、さらさ玉子など、江戸時代に食されていた献立も

「家康の健康長寿の秘訣は食習慣にあり」として、現在岡崎市内の飲食店では「家康公健康長寿めし」が提供されている。八丁味噌や岡崎おうはん、麦飯など、家康や岡崎ゆかりの食材と多くの野菜を使った料理は、体にやさしいものばかり。「岡崎ニューグランドホテル」「おぎ乃」「Nippon 食の森 あざれあ」にて提供中だ。

岡崎市観光協会(お問合せ)  
TEL 0564-64-1637









開催場所 岡崎公園 三河武士のやかた家康館 (愛知県岡崎市康生町561-1)

開催期間 令和5年1月21日(土)～令和6年1月8日(月・祝)

開館時間 9:00～17:00 (最終入場時間 16:30)

休館日 無休

料金表	大人 (高校生以上)	小人 (小・中学生)
通常	800円	400円
団体 (20名以上)	640円	320円
パスポート	2,000円	1,000円
共通 (大河ドラマ館&岡崎城)	890円	

未就学児無料。前売券の販売場所やパスポートの申込みについては、当館の公式HPでご確認ください。



公式  
HP



公式  
Twitter



お問い合わせ: どうする家康 岡崎 大河ドラマ館 TEL.0564-25-1883